The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	在日韓国・朝鮮人の生活文化
Author(s)	許, 点淑
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/41989
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【13】

氏　　名	許（ほー）　点淑（じょんすく）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学位記番号	第　15123　号
学位授与年月日	平成12年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科人間学専攻
学位論文名	**在日韓国・朝鮮人の生活文化**
論文審査委員	（主査） 教授　小泉　潤二 （副査） 教授　春日　直樹　　教授　中川　敏

論文内容の要旨

本論文では、在日韓国・朝鮮人コミュニティーが日本社会に形成されてきた歴史的経緯を始めとして、その社会の構成員が自分たちのコミュニティーと日本社会との間でアイデンティティを形成していく有様が、主に「姓名」・「言語」・「規範意識」・「巫俗信仰」などの諸領域にどのように反映されているのかを検討した。

まず、在日韓国・朝鮮人社会における本名と通名のあり方について、調査によって得られたデータをもとに考察を行った結果、彼らにとって本名と通名は、単に自他を区別するものだけではなく、自分たちのアイデンティティの位置づけとしての象徴的な存在であることが明らかになった。そのアイデンティティのあり方に関わるファクターとしては、日本人という他者の存在及びその世界との接触や、実際にそれらの呼称が用いられる使用状況、さらに、社会的マイノリティ内でのネットワークなどが関与しており、自己の固有名がそれらの諸要因に応じて、かなり自由に選択されるものであることが判明した。

そのなかでも、本名と通名の間における選択肢の多様性は、在日韓国・朝鮮人の生活文化の各領域が、幾重にも重なる複数の構造に支えられていることを示唆していた。その選択をめぐるアイデンティティのあり方は興味深いところである。ある同一の在日韓国・朝鮮人が、その人生過程の上で、新しい社会関係に出会うたびに本名と通名を何度も入れ換えている例も見受けられた。

その様な事例の数々を取り上げて分析を行った結果明らかになったことは、在日韓国・朝鮮人の本名と通名の使い分けは、単にどちらかを選ぶだけの二者択一の問題ではないということである。名前の使い分けに見られる類型に関しては、少なくとも次にあげるような三つの形態が存在することが明らかとなった。

その第一の形態は、本名と通名のどちらを名のるかを決める際に、日本の社会的コンテクストに沿う形で、生活の実践的次元に立って日本式の通名を名のるケースである。この場合、日常の生活を送る上で目立った葛藤を意識せずに済ませることができる。ただ、自己の内面に立ち返る契機に出会った場合、アイデンティティの危機に陥る場合もあることは否定できない。

次に第二の形態として、本名を日本語読みするパターンがあげられる。このパターンには、母国と日本の社会的規範の間で揺らぎをみせる在日韓国・朝鮮人社会の現実が如実に現れていると言えよう。この本名の日本語読みには本名の文字がそのまま維持されるという点から、日本式の通名よりもそれから受ける抵抗感は少ないものの、本来の発音が変えられるというところに、生活の場としての日本社会が持つ権力の構造が何らかの形で作用していることが読

み取れる。だが、本名の日本語読みはあいまいな立場であると同時にニュートラルなものでもあるということができる。というのは、一方は本国である韓国・朝鮮との、もう一方は日本との連なりを想定しているからである。そうであるが故に、枠組みとしては不安定なものの、それは日本社会と韓国・朝鮮社会のどちらにも収まりきらない在日韓国・朝鮮人社会の独自性を象徴するファクターとして機能している。

そして第三の形態は、自分の出自を再確認するために、本名を母国語読みしたものを用いるケースである。この場合、かれらにとってはアイデンティティが再確認されることになり、在日社会の結束とともに、韓国や北朝鮮といういわゆる「本国」との絆が意識的に強まるだろう。その上でまた、在日韓国・朝鮮人という日本と「本国」の両方からはみ出した存在としてのアイデンティティを培うことにもつながる。

更に姓名に関してもう一つ興味深いことは、在日韓国・朝鮮人社会の場合、同じ在日韓国・朝鮮人と結婚した後、妻が夫の姓の通名を名のる事例がみられる。これは日本社会における夫婦同姓の慣習（とりわけ夫の姓に妻が同一化する場合が多い）に同化した事例であり、本国のように夫婦別姓を保つよりは、日本社会の規範を受け入れた結果である。このように、姓名という固有名をめぐって、在日韓国・朝鮮人の生活の実践にあらわれてくる文化的状況は、非常に多様で複雑な様相をとることが分かる。

次に、在日韓国・朝鮮人における言語の使用状況に関する考察を行った。その結果、最初に異境の地へと渡ってきた経緯が意図的なものであるか否かを別にしても、こうした移住者コミュニティにおいてみられる常として、世代間における母語と母国語の位置付けの変化を指摘することができた。在日韓国・朝鮮人の場合、一世では母国語＝韓国（朝鮮）語が母語であり、母語と母国語はほとんど一致するが、二世以降になるとそれは必ずしも一致しない。二世以降の場合、日本語が母語である場合が多く、母語と母国語とは異なった言語となる。つまり、世代交替の過程で母語の概念と認識、能力に違いが生じる。

今回の調査で対象となった家庭では、ほとんどの場合日常語は日本語である。ただし、母国語は一世の祖母との会話や、韓国から来た配偶者との間で話されるなど、日本人から隔離され閉鎖された空間でのみ使われる。母国語の中でも比較的よく使われるタームは、料理や生活道具、親族呼称などに限られる。その理由として、日本語に置き換えようとしても適当な言葉がなく、無理に言い換えると説明的になりがちであることが考えられる。

このように「在日」の家庭内ではほとんど日本語だけを用いるモノリンガル化が進むと同時に、元来の「母国語」は家庭内に封じ込まれる傾向も着実に進んでいる。このような状況のもとでは、生活実践の場でもある日本社会との接触の度合いによって、母国語の使用が抑制される反面、年配の相手に配慮する場合や、仲間うちだけでのコミュニケーションを楽しむ場合など、特殊な状況において母国語の使用が表面に現れてくることが分かった。

更に、姓名や言語以外にも、日本と韓国・朝鮮の二つの社会的規範のはざまで生きる在日韓国・朝鮮人の生活文化の実践におけるありさまが細かく映し出される側面について、多岐にわたる調査・分析を行った。ここでは、ある特定のインフォーマントを設定し、その生活史をたどる上で見出すことのできた局面を、日本で暮らすマイノリティの普遍的な問題として捉え直した。

ここでインフォーマントとして設定された人物は、幼い頃、家庭内の民族的な色彩をもつ生活様式をできるだけ排除しようとする家庭環境で育ったものの、画家としての自身の活動のうえで韓国人としての帰属意識を強く持つようになり、それは作品制作のなかにも表出するようになった。

このようなアイデンティティの変遷は、その規範意識のありさまにも色濃く現れている。中でも特筆すべき点は、贈与交換や金銭感覚などの経済的行為、すなわち生活の実践的次元においては、日本と本国の両規範を適宜使い分けているということである。ここでインフォーマントは、日本人とのネットワークでは日本の規範に従い、在日社会に基盤をおいた人間関係では本国の規範を優先させるというように、相手の社会的属性による両規範の使い分けをしている。

しかし、このように流動的とも受けとれる生活規範の使い分けが、生活の実践的な次元では観察されるものの、「お墓の立て方」や自分の姓名、子どもの教育のあり方など、生活の根幹にかかわる価値観の次元になると母国文化に対する強い執着が現れてくる。これはこのインフォーマントが、幼い頃に育った環境において、民族文化に対する価値観の希薄な状況におかれていたことと全く対照をなしている。このように、在日韓国・朝鮮人コミュニティーにおいては、世代間において生活実態の相違が現れているのみならず、一個の個人の内面においてもその人格形成の中

で、価値観に齟齬をきたす場合があることを認めることができた。

また、これに続く章では、在日韓国・朝鮮人の社会における巫俗信仰の概要に焦点をあてて考察を試みた。在日韓国・朝鮮人の社会で巫俗信仰が行われる社会的な背景と、巫俗を通して彼らは何を求めているかについて考察した結果、以下のような結論を得た。

彼らは自分たちのアイデンティティを再確認するために、一世を中核に形成されたネットワークを中心に巫俗信仰儀礼を行っているが、それは仏教との間でのシンクレティックな現象として現れ、韓国・朝鮮的な要素や日本的な要素、更には在日韓国・朝鮮人コミュニティーに特有の要素を同時に含む、ハイブリッドな現象として現れている。

彼らは巫俗信仰から現世利益思想と民族的なアイデンティティの再確立を求め、シャーマンと信者との間に行われるコミュニケーションの中に恨（ハン）を和らげ、生活に活気をあたえる巫俗の機能をも見出している。

以上にみてきたように、本稿は、在日韓国・朝鮮人社会やその構成員が、日本という社会的コンテキストの中で、自分たちのアイデンティティ意識と深くつながる「姓名」・「言語」・「生活規範（慣習）」・「宗教（巫俗）」などの諸領域にどのような形で関わっているのかという問題について考察を行った。そこでは、それぞれの生活文化領域における世代間の多様性に加え、同一人物であってもその人生の人格形成の過程により、生活文化における態度のとり方は一様でないことが分かった。

これらの多様性は、在日韓国・朝鮮人として実際に生活する上での「実践的な次元」と、価値観や道徳的配慮などの「意識的な次元」との間におけるズレが、それぞれのケースに固有の形で現れていることによるものと考えることが出来る。このため、個々の状況を無視した形で、あるコミュニティーの文化のあり様を一定の型に押し込めようとすると、その構成員が実際に生活する現実世界から目をそらしてしまうことになる。したがって、在日韓国・朝鮮人の生活文化における多様性の中に、この二つの次元のズレがどのように浮かび上がってくるのかというところに視点を置いて捉えていく必要がある。

このように、在日韓国・朝鮮人は何らかの形で韓国（朝鮮）と日本の両文化の伝承や規範などのはざまで生きており、それは世代や個人の置かれた社会的コンテキストによって異なりをみせるのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、在日韓国・朝鮮人の生活文化に関して、オリジナルな調査に基づいて書かれた人類学的研究である。2つのアイデンティティのはざまで生きる在日韓国・朝鮮人の実際生活において、2つの異なるアイデンティティがどのようなコンテクストにおいてどのような形で現れるかを明らかにしようと試みた。このために在日韓国・朝鮮人が自ら用いる姓名、選択して使用する言語、信仰する宗教とその儀礼という3つの側面を選び、それぞれについての調査結果を詳細に記述し考察を加えている。とくに巫俗信仰と朝鮮寺についての研究を行った部分は、資料が貴重であり優れた民族誌として評価することができる。また本論文で扱った問題領域に対する人類学的アプローチ自体が既存の研究には乏しく、その意味で評価することもできる。

以上により本論文が、課程博士の論文として学位を授与するに十分であると判定した。